

9月予報（全11枚）

病防第81号  
平成19年8月31日

各関係機関長 様

（熊本県）病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

平成19年度発生予察情報第6号を下記のとおり発表しましたので、送付します。

平成19年度発生予報第6号（9月予報）

平成19年8月31日  
熊 本 県

1 向こう1ヶ月の気象予報：平成19年8月24日福岡管区気象台発表（単位：％）

	予 報 対 象 地 域	低い （少ない）	平年並	高い （多い）
気 温	九州北部全域（含、山口県）	20	40	40
降 水 量	九州北部全域（含、山口県）	30	40	30
日照時間	九州北部全域（含、山口県）	30	30	40

2 発生予報の概要

作 物	病虫害名	発 生 量		作 物	病虫害名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
普通期 水 稻	穂いもち	少	並	茶	チャノアザミワ	やや多	やや多
	紋枯病	やや多	やや多		チャノミドリキコバエ	並	やや多
	ヒメハダニ	多	やや多		カザリダニ	並	やや多
	カメムシ類	やや多	並	カンキツ	かいよう病	並	少
大 豆	ハモロギ	やや多	やや多		黒点病	並	並
	カメムシ類	やや多	やや多		ミカンダニ	並	並
茶	炭疽病	やや少	やや少	ナ シ	チャノアザミワ	並	並
	チャノカメムシ	やや多	並		黒星病	並	並
	チャハマキ	並	並		うどんこ病	並	並
	チャノホソガ	やや多	やや多		ハダニ類	やや多	多

作 物	病害虫名	発 生 量		作 物	病害虫名	発 生 量	
		平年比	前年比			平年比	前年比
カ キ	炭疽病	並	並	夏秋キャベツ (高冷地)	細菌性病害 (黒腐病、軟腐病等)	並	並
果樹全般	果樹カミシ類	少	並				
夏秋 トマト (高冷地)	葉かび病	並	並	果 菜 類	コナジラミ類	やや多	やや多
	灰色かび病	やや多	やや多		アザミウマ類	並	並
夏秋ナス (平坦地雨 よけ)	すすかび病	並	並	イ チ ゴ	ハダニ類	多	やや多
	うどんこ病	やや少	やや多				
イ チ ゴ (育苗床)	炭疽病	並	並	夏秋キャベツ (高冷地)	コナガ	並	並
	うどんこ病	並	並	野菜全般	ハモトウ	並	並
					オオタバコガ	並	並

### 3 予報概要、根拠、対策等

イネ（普通期）

#### 1）穂いもち

（１）発生量：少

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、穂いもちの発病株率は0.2%（平年1.1%）と平年より少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の穂いもちの発生は概ね平年よりやや少ない。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並み高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 晩期水稲において、上位葉に病斑が見られるほ場や、病斑が多く見られるほ場では、穂ばらみ期から穂揃い期にかけて防除を徹底する。

#### 2）紋枯病

（１）発生量：やや多

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率4.6%（平年1.6%）と平年よりやや多い発生であった。

イ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

（３）対策 ア 晩期水稲において、穂ばらみ期の発病株率が要防除水準（発病株率20%）に達した場合は、粉剤、水和剤等により穂ばらみ期から出穂期にかけて防除を行う。普通期水稲においても、上位葉鞘へ病斑が伸展している場合は治療効果のある薬剤で防除を行う。

#### 3）トビイロウンカ

（１）発生量：多

（２）根拠 ア 8月の巡回調査では、1.2頭/10株（平年0.4頭/10株）と平年よりやや多い発生であった。

イ 予察灯への誘殺数は、生産環境研究所（合志市）では平年並、天草農業研

究所（天草市）では平年よりやや少ない。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は概ね平年並である。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 要防除水準は株当たり3頭（収穫30日前）である。発生はほ場間差及び同一ほ場内でも分布にムラがあるので、ほ場の発生状況を注意深く確認したうえで防除を行う。

イ 出穂以降の防除は株元への到達度が劣るので、粉剤及び液剤で防除する際は株元へ付着するよう丁寧に行う。

ウ 詳細は平成19年8月23日付け注意報第2号を参照。

#### 4）カメムシ類

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 生産環境研究所（合志市）における予察灯調査では、クモヘリカメムシは平年より少なく、シラホシカメムシとアカスジカスミカメは平年並、ミナミアオカメムシとアオクサカメムシは平年より多かった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は概ね平年並である。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 常発地帯では、穂揃期とその7日～10日後の2回防除を行う。

イ イネ科雑草（エノコログサ、ヒエ類、メヒシバ）が繁茂し出穂している休耕地等が近くにある場合には、被害を受けやすいため注意する。なお、出穂期以降に周辺の除草を行うと、雑草から水田へ飛来し被害を助長することがあるので、除草は控える。

### 大豆

#### 1）ハスモンヨトウ

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 8月の巡回調査では、幼虫数は39.4頭/10株（平年7.7頭/10株）と平年より多かった。

イ フェロモントラップの誘殺数は、生産環境研究所（合志市）では平年並、い業研究所（八代市）では平年より少なかった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 初期の食害発生に注意するとともに、白変葉（若齢幼虫による白色化した被害葉）が認められたら防除を行う。なお、ほ場によって発生状況が違いため、防除適期を逃がさないようにほ場をよく見回り、早期発見に努める。

イ 老齢幼虫に対しては薬剤の効果が低下するため、防除効果の高い若齢幼虫期に防除を行う。

ウ 8月に発生が少なかったほ場でも、9月に入り急激に多発することがあるので今後の発生に注意する。

#### 2）カメムシ類

（1）発生量：やや多

（2）根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生頭数は0.0頭/m<sup>2</sup>（平年0.4頭/m<sup>2</sup>）と平年並であった。

イ 生産環境研究所（合志市）の予察灯での誘殺数は、ミナミアオカメムシ、アオクサカメムシは平年より多かった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少であった。

エ 気象予報によると、9月の気温は平年並が高く、降水量は平年並の予想である。

（3）対策 ア 少発生でも被害が大きいいため、開花終期～子実肥大期にかけて防除を行う。

イ カメムシ類の発生はほ場間差が大きく、近隣に発生が確認されなくても多発することがあるので注意する。

## 茶

### 1) 炭疽病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、病葉数は  $0.7 \text{ 葉} / \text{m}^2$  ( 平年  $9.9 \text{ 葉} / \text{m}^2$  ) と平年より少ない発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 常発地では、摘採残葉の発病状況に注意するとともに、秋期の発生は翌春一番茶の収量・品質に及ぼす影響が大きいので、萌芽～3葉期に防除する。

### 2) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉数は  $0.3 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ( 平年  $3.7 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ) と平年より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、7月5半旬に平年より高いピークが認められ、その後も平年よりやや多く推移している。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、8月1半旬に平年より高いピークが認められ、その後も平年よりやや多く推移している。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや少～少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 秋芽の被害を軽減するため、秋芽生育期に若齢幼虫を対象に防除を行う。

### 3) チャハマキ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉は認められず( 平年  $0.0 \text{ 枚} / \text{m}^2$  )、平年並の発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップの誘殺数は、平年並であった。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップの誘殺数は、平年よりやや少であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア チャノコカクモンハマキに準じる。

### 4) チャノホソガ

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害葉数は  $0.1 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ( 平年  $4.7 \text{ 枚} / \text{m}^2$  ) で平年より少ない発生であった。

イ 生産環境研究所(合志市)のフェロモントラップでは、8月2半旬に平年より高いピークが認められ、その後も平年より多く推移している。

ウ 茶業研究所(御船町)のフェロモントラップでは、7月は平年よりやや多く、8月も平年よりやや多く推移している。

エ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。

オ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 新葉にのみ産卵するため、秋芽萌芽～3葉期に防除する。

イ 三番茶不摘採園では発生が多くなりやすいので注意する。

### 5) チャノキイロアザミウマ

( 1 ) 発生量 : やや多

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、寄生葉率は 6.8 % ( 平年 1.7 % ) と平年よりやや多い発生であった。

イ 生産環境研究所 ( 合志市 ) の黄色粘着トラップの誘殺数は、平年比やや少であった。

ウ 茶業研究所 ( 御船町 ) のたたき落とし調査では、平年比やや少であった。

エ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや多 ~ 並であった。

オ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 加害は主に新葉のみ行われるので、チャノホソガに準じて防除を行う。

#### 6 ) チャノミドリヒメヨコバイ

( 1 ) 発生量 : 並

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、寄生葉率は 1.4 % ( 平年 2.6 % ) と平年よりやや少ない発生であった。

イ 茶業研究所 ( 御船町 ) のたたき落とし調査では、平年比少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並 ~ やや少であった。

エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 加害は主に新葉のみ行われるので、チャノホソガに準じて防除を行う。

#### 7 ) カンザウハダニ

( 1 ) 発生量 : 並

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、寄生葉は認められず ( 平年 3.1 % ) 、平年より少ない発生であった。

イ 茶業研究所 ( 御船町 ) の寄生葉率調査では、平年比少であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並 ~ やや少であった。

エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 9 月は発生が多くなる時期で、今後、発生の好適条件が続くことも予想されるため、茶園をよく観察し、発生を認めたら防除を行う。発生が多くなってからでは、どの薬剤も効果が得られないため、発生初期の防除に心がける。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### カンキツ

#### 1 ) かいよう病

( 1 ) 発生量 : 並

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、発病葉率 1.7 % ( 平年 4.4 % ) 、発病果率 1.5 % ( 平年 6.8 % ) と平年よりやや少ない発生であった。

イ 果樹研究所 ( 宇城市 ) の調査 ( 無防除樹の甘夏 ) では、8 月 6 半旬の発病葉率が 4.1 % ( 平年 16.2 % ) 、発病果率が 70.0 % ( 平年 46.3 % ) であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比多 ~ やや多である。

エ 気象予報によると、9 月の降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 夏秋梢のミカハダガリガの食害痕に、発病しやすいので防除を徹底する。

イ 発病した葉・枝・果実はなるべく剪除し、伝染源密度の低下を図る。

ウ 強風雨 ( 風速毎秒 6 m 以上 ) は傷を作り、病原菌の侵入門戸となるので防風対策 ( ネット等 ) を整備する。

#### 2 ) 黒点病

( 1 ) 発生量 : 並

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、発病果率 10.5 % ( 平年 11.8 % ) と平年並の発生であった。

イ 果樹研究所 ( 宇城市 ) の調査 ( 無防除樹の興津早生 ) では、8 月 6 半旬の

発病果率が 100.0 % ( 平年 94.9 % ) で、発病度は 38.6 ( 平年 36.7 ) でった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生が平年比やや多～少である。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 伝染源となる枯枝は、園外に処分する。

イ 定期的に園を見回り降水量 200 ～ 25 mm または前回散布から 25 ～ 30 日経過したら防除を行う。

### 3 ) ミカンハダニ

( 1 ) 発生量：並

( 2 ) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 7.6 % ( 平年 10.3 % ) と平年並の発生であった。

イ 果樹研究所( 宇城市 ) の調査では、8月 5 半旬の寄生葉率は 19.0 % ( 平年 27.8 % ) 、100 葉当たりの寄生頭数は、23 頭 ( 平年 198.7 頭 ) であった。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並である。

エ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア ミカンハダニの要防除水準は、メス成虫の寄生葉率 30 ～ 40 % 、10 葉当たりの寄生頭数 5 ～ 10 頭である。

イ ミカンハダニの防除は、薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

### 4 ) チャノキイロアザミウマ

( 1 ) 発生量：並

( 2 ) 根拠 ア 8月の巡回調査では、被害果率 7.5 % ( 平年 3.0 % ) と平年比やや多の被害であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～やや少である。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 被害果を摘果し、園外に処分する。

イ 発生程度の調査は、展着剤あるいは洗剤を 5,000 ～ 10,000 倍に薄めてコップやビーカーに入れ、液で果実 ( 100 果 ) を洗い、洗った液をティッシュペーパーでこし、ルーペや実態顕微鏡で虫数を調査する。調査の結果 15 頭以上を確認したら直ちに防除する。

## ナシ

### 1 ) 黒星病

( 1 ) 発生量：並

( 2 ) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉を認めなかった ( 平年 2.9 % ) 。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並である。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 秋型病斑は、葉裏に薄くススをつけた病斑で、9月以降に急激に増加することもあり、芽鱗片への感染を防ぐため、収穫後の防除を徹底する。

### 2 ) うどんこ病

( 1 ) 発生量：並

( 2 ) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病葉率 0.3 % ( 平年 0.8 % ) と平年並の発生であった。

イ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 収穫期から収穫後に多発生して早期落葉により樹勢が低下するので、発生初期に薬剤を散布する。

### 3 ) ハダニ類

( 1 ) 発生量：やや多

( 2 ) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率 12.5 % ( 平年 7.1 % ) と平年比やや多の発生であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少である。

ウ 気象予報によると、9月の降水量は平年並の予想である。

- (3) 対策 ア 要防除水準は、雌成虫の寄生葉率 20 %以上、1 葉当り 1 ~ 2 頭である。  
イ ハダニ類の薬剤防除は、抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

## カキ

### 1) 炭疽病

- (1) 発生量：並  
(2) 根拠 ア 8 月の巡回調査では果実の発病を認めなかった（平年の発病果率 0.7 %）。  
イ 気象予報によると、9 月の降水量は平年並の予想である。  
(3) 対策 ア 徒長枝の発病が多くなると果実の発病も多くなるので、発病した枝は園外に処分し、病原菌の密度を下げる。  
イ 台風後に多発するので、襲来前後の防除を徹底する。

## 果樹全般（カキ、ナシ、カンキツ類等）

### 1) カメムシ類

- (1) 発生量：少  
(2) 根拠 ア 生産環境研究所（合志市）、果樹研究所（宇城市）および天草農業研究所（天草市）における予察灯やフェロモントラップの誘殺数は、平年比少であった。  
イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並～少であった。  
(3) 対策 ア カメムシの発生は、地域差が大きいので、注意を怠らず園をよく見回り成虫の発生に注意し、初期防除を徹底する。

## 野菜病害

### 夏秋トマト（高冷地）

#### 1) 葉かび病

- (1) 発生量：並  
(2) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、発病株率 29.7 % (平年 58.5 %) と平年比やや少の発生であった。  
イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや多～並の発生であった。  
ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。  
(3) 対策 ア 草勢が衰えると多発するため、肥料切れしないように、適正な肥培管理に努める。  
イ 被害葉や老化葉を除去し、通風、採光を図る。  
ウ 早期発見に努め、発病初期のうちに葉の裏面にも十分かかるように薬剤防除を行う。

#### 2) 灰色かび病

- (1) 発生量：やや多  
(2) 根拠 ア 8 月の巡回調査では、発病株率が 42.7 % (平年 23.0 %) と平年比やや多の発生であったが、発病果は認められなかった。  
イ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並であった。  
ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。  
(3) 対策 ア 被害葉や被害果、老化葉は早めに除去し、通風採光を良くする。  
イ 同系統の薬剤を連用すると薬剤感受性が低下しやすいので、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

### 夏秋ナス（平坦地、雨よけ栽培）

#### 1) すずかび病

( 1 ) 発生量：並

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では発病株率 7.5 % ( 平年 0.9 % ) と平年比やや多の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8 月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 排水を図り、かん水過多とならないように注意する。

イ 初期の発病葉は早めに除去する。また、ハウスやその周辺に病葉を放置すると伝染源になるので、摘除後は速やかに処分する。

ウ 薬剤防除は発生初期から行う。

## 2 ) うどんこ病

( 1 ) 発生量：やや少

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では発病株率 4.5 % ( 平年 3.1 % ) と平年並の発生であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8 月の発生は平年比少であった。

ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 通風採光を良くする。

イ 不要な下葉はできるだけ除去する。

ウ 発病初期から薬剤散布を行う。

## イチゴ ( 育苗床 )

### 1 ) 炭疽病

( 1 ) 発生量：並

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では発病株率 1.5 % ( 平年 1.6 % ) と平年並であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8 月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 罹病株があると降雨やかん水により急速に蔓延するので、定植時には発病していない健全な苗を定植し、また、ビニール被覆するまでは発生に特に注意し、被害茎葉や被害株は速やかに除去し処分する。

イ 発病後の薬剤散布は効果が低いため、予防散布に努め、風雨の後は防除を徹底する。

ウ 次年度用の親株は、無病苗を選抜し、前年に発生の見られたほ場は親株床として使用しない。

### 2 ) うどんこ病

( 1 ) 発生量：並

( 2 ) 根拠 ア 8 月の巡回調査では発病を認めず、発病株率は平年並 ( 平年 0.1 % ) であった。

イ 病虫害防除員からの報告では、8 月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

( 3 ) 対策 ア 定植前まで防除を徹底し、罹病株を本ばに持ち込まないようにする。また、定植後は活着後から開花期までの防除に重点を置く。

イ 薬剤が葉裏に十分かかるように散布する。

ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤感受性が低下しやすいので、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

## 夏秋キャベツ ( 高冷地 )

### 1 ) 細菌性病害 ( 黒腐病、軟腐病、黒斑細菌病 )

( 1 ) 発生量：並



- (2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、発病株率が黒腐病 3.3 % ( 平 年 2.1 % ) と 平 年 並、軟腐病 1.0 % ( 平 年 0.9 % ) と 平 年 並、黒斑細菌病は発病を認めず平年並 ( 平 年 0.0 % ) であった。
- イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並～少であった。
- ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。
- (3) 対策 ア ほ場の排水を良くする。
- イ 被害残さの処分など、ほ場の衛生管理を徹底する。
- ウ 台風襲来が多い時期なので、気象予報に十分注意し予防防除に努める。

## 野菜虫害

### 果菜類

#### 1) コナジラミ類

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地雨よけ栽培の夏秋ナスでは寄生葉率が 4.0 % ( 平 年 16.6 % ) と 平 年 比 や や 少、高冷地の夏秋トマトでは寄生葉率 47.0 % ( 平 年 27.5 % ) と 平 年 比 や や 多 で あ っ た。なお、寄生種は高冷地のトマトはオンシツコナジラミが多く、平坦地のナスではタバココナジラミが主体であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比やや多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の違う薬剤のローテーション使用を行う。

**ウ タバココナジラミが媒介するトマト黄化葉巻病の防除対策は別枠参照。**

#### 2) アザミウマ類

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、平坦地雨よけ栽培の夏秋ナスでは寄生葉率が 6.0 % ( 平 年 0.9 % ) と 平 年 比 や や 多 の 発 生 量 で あ っ た。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、早い時期から防除を徹底する。

ウ 発生源となる周辺雑草の除去を行う。

**エ ミナミキイロアザミウマはキュウリ黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では害虫の発生に注意し、防除対策を徹底する。**

## イチゴ

#### 1) ハダニ類

(1) 発生量：多

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生葉率が 39.0 % ( 平 年 5.6 % ) と 平 年 比 多 の 発 生 で あ っ た。

イ 病害虫防除員からの報告では、8月の発生は平年比多～並であった。

ウ 気象予報によると、9月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

イ 寄生密度が高くなると防除が困難なため、発生初期の防除を徹底する。

**ウ 本ばでの発生は主に寄生苗の持ち込みによるものが多いため、定植前の防除を徹底する。**

夏秋キャベツ（高冷地）

1) コナガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、寄生株率 25.0 % ( 平年 26.3 % ) と平年並の発生であった。

イ フェロモントラップでの誘殺状況（平成 14 年から調査）は、5 月のピーク以降平年に比べやや少なく推移していたが、8 月中旬頃からやや増加傾向にある。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年比少の発生であった。

エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

イ 収穫残さは発生源となるので、直ちに処分する。

野菜全般

1) ハスモンヨトウ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、高冷地の夏秋トマトでは寄生株率 0.7 % ( 平年 0.0 % ) とほぼ平年並、平坦地雨よけ栽培の夏秋ナスでは寄生株率 0.5 % ( 平年 0.8 % ) と平年並、イチゴ育苗床では寄生株率 1.7 % ( 平年 1.0 % ) と平年並の発生であった。

イ フェロモントラップでの誘殺数は、生産環境研究所（合志市）では平年並、い業研究所（八代市）ではほとんど誘殺されていない。山都町鶴底では平年より少ないが、阿蘇市波野では平年並である。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並であった。

エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。なお、ネット上に産卵し、ふ化幼虫が施設内に侵入することもあるので注意する。

ウ 卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら直ちに除去する。

エ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

2) オオタバコガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠 ア 8月の巡回調査では、高冷地の夏秋トマト、平坦地雨よけ栽培の夏秋ナスで寄生は認めなかった（平年の寄生株率トマト 0.1 %、ナス 0.1 % ）。

イ フェロモントラップでの誘殺数は、生産環境研究所（合志市）では平年並、い業研究所（八代市）では平年比少、山都町鶴底でも平年より少ない。

ウ 病害虫防除員からの報告では、8 月の発生は平年並～少であるが、一部地域のトマトで発生がやや多くなっている。

エ 気象予報によると、9 月の気温は平年並か高く、降水量は平年並の予想である。

(3) 対策 ア 老齢幼虫になると薬剤の効果が劣るため、早期発見に努め、若齢幼虫期の防除を行う。

- イ 施設栽培では成虫の侵入を防ぐため、施設の開口部を防虫ネット等で被覆する。
- ウ 同系統の薬剤を連用すると薬剤抵抗性が発達する恐れがあるため、他系統薬剤とのローテーション使用を行う。

### 「トマト黄化葉巻病」徹底防除！！

作期を統一している冬春トマト産地における野外のコナジラミのトマト黄化葉巻ウイルス保毒率は、8月上旬には5.0%に低下しています（平成19年8月13日付技術情報第8号参照）。しかし、皆無ではありません。トマト黄化葉巻病は育苗期に感染すると被害が大きくなりますので、今後の発生を抑制するためには、以下の防除対策を徹底することが必須です。

＜育苗期から生育初期の防除対策＞

#### 播種・定植前の管理：

施設周辺及び内部の野良生えトマトや雑草は、ウイルスの伝染源、タバココナジラミの生息・増殖場所となるので、必ず播種や定植の10日前までに除去する。

育苗期から栽培期間中も定期的に除草する。

#### 施設内へのタバココナジラミ侵入防止：

育苗施設やハウス等の開口部（天井、サイド、換気部など）には目合い0.8mm以下の防虫ネットを必ず設置し、タバココナジラミの侵入を抑制する。特に、育苗時に感染すると感染株は収穫皆無になる恐れがあるため被覆を徹底する。なお、目合いを小さくするほど侵入阻止効果は高いが、高温対策に留意する。

また、育苗ハウスは近紫外線除去フィルムを天井に使用するか、ハウス周囲に光反射マルチを150cm幅で設置し、できるだけ侵入抑制を図る。

#### コナジラミの早期発見：

黄色粘着トラップを施設内に設置し、コナジラミの早期発見に努める。

#### 感染源の除去：

発病株は二次伝染源となるので、見つけしだい直ちに抜き取り施設外に持ち出し埋没処分するか、ビニール袋等に入れて完全に枯れるまで密封処理する。

#### 薬剤防除：

防虫ネットのみでは、タバココナジラミの侵入を完全には防げないため、薬剤防除を併せて徹底する。また、育苗期後半、定植時には粒剤を施用する。また、県内でタバココナジラミバイオタイプQの発生が確認されている（平成17年11月7日付特殊報第2号参照）。本害虫の発生状況および各種薬剤の殺成虫効果については平成18年2月16日付技術情報第13号参照。

（注意：農薬使用にあたっては、使用方法、使用時期、総使用回数等を厳守する。）

### 農薬安全使用上の留意

ポジティブリスト制度の施行により、農薬、作物の残留基準値を超えたものは流通が禁止されています。薬剤防除を行う際は、必ず登録のある農薬を使用し、ラベルなどで使用方法を確認し、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守すること。また薬剤が周辺作物へ飛散しないよう飛散防止対策を徹底すること。

詳しい内容等については  
生産環境研究所病害虫研究室（病害虫防除所）（TEL：096-248-6490）にお問い合わせ下さい。

なお、本文はホームページ「<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>」上に掲載しています。